



バッハの森通信

第 158 号
2023 年
1 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

音楽の命の力で

元気になろう

新年おめでとうございます、と年頭の祝詞を申し上げて、これほど多くの難題を抱えた新年に、おめでたいどころではない、という声が聞こえてきそうです。コロナ禍、地球温暖化による異常気象、ウクライナでいつまでも続く戦争、世界各地の専制支配者たちが行う数々の人権侵害行動等々。私たち一般市民は、何の解決策も見つけられないまま諸々の難題の前に立ちすくみ、無力感を覚えるだけです。

* * *

でも私たちは今年で 39 年目となる文化活動、「バッハの森」を続けます。勿論、世界の諸々の難題の解決に貢献するためというような大それたことは考えていません。それは政治の問題で、バッハの森は政治には関与しません。またしばしば誤解されますが、バッハの森はキリスト教会でも、宗教団体でもありません。ただしバッハの森のテーマは「キリスト教文化」です。

宗教と文化を切り離して扱えるのか、と疑問に思う方がいるかもしれませんが、現代の一般日本人の生活に、宗教とは無関係にキリスト教文化がすでに深く浸透していることに気付いておられるでしょうか。例えば、日曜日を休日にする、クリスマス祝うことなどは、明白にキリスト教から始まった習慣です。それに「西暦 2023 年」と年号を数える多くの日本人は、それがキリスト教文化圏の年号と理解しているのでしょうか。これを完全に表記するなら“A.D.2023”です。“A.D.”とは“Anno Domoini”の省略形、ラテン語で「主の年に」を意味し、「イエス・キリストの降誕から何年」を表しているのです。このように、日曜日も

クリスマスも西暦も、日本人は器用に非宗教化して自分の生活文化の中に取り入れています。

* * *

しかしバッハの森は、このような実利的なキリスト教文化の非宗教化を目指しているわけではありませぬ。先ずキリスト教文化の中で最も普遍性の高い教会音楽が活動の中心であることを断っておきます。音楽には不思議な魔力があり、意味を特定しないまま喜怒哀楽を表現することができます。特に意味を考えなくても、美しい調(ソ)ベには自然に心が惹かれます。よく経験することですが、歌詞は忘れたが旋律は覚えているというのも音楽の魔力です。どうしても意味を考えてしまう絵画や彫刻との違いです。

バッハの森では、教会音楽をキリスト教文化を知る入り口と考えています。大切なことは、教会音楽は大変奥が深いことです。紀元前 6 世紀にエルサレムに再建された第二神殿の祭儀で朗読された詩篇に始まり、古代教会でラテン語のミサ典礼が定まると、典礼聖歌がグレゴリオ聖歌として集大成されました。中世を通して継承された教会音楽はルネサンス期に花開き、多数のミサ曲が作曲され、バロック期に民衆の音楽、コラールが加わってバッハの音楽となりました。

現在、バッハの森では、主にミサ曲とコラールを歌っていますが、これらの音楽の歌詞はすべて聖書に由来しますから、意味を知って歌うためには、聖書を読まざるをえません。ただしバッハの森は全く自由な組織ですから、歴史や聖書まで学ぶことを誰にも要求しません。むしろ、これだけの歴史を背負った教会音楽の魔力に期待しています。

ですから、皆さん、諸々の難題をひとまず忘れ、バッハの森に来て、バッハのカンタータやコラール、ミサ曲などの教会音楽を楽しんでください。聴いていれば、歌っていれば、演奏していれば、数千年にわたって教会音楽を伝えてきた命の力を受けて、いつのまにか元気になるはずですよ。(石田友雄)

クリスマスの喜び

ろばに乗って来る王が支える

* このメディタツィオは、2022年12月11日にバハの森記念奏楽堂で開かれた「クリスマス・コンサート」で朗読された原稿を修正した文章です。

クリスマス・イヴの晩に、寝ている間にサンタさんが枕元にプレゼントを置いていってくれるのを信じて、わくわくしながら眠りにつき、クリスマスの朝、眼が覚めると枕元に素敵なお品があるのを見て喜びに踊り上がった子どもの頃を思い出してください。この、世界中の子どもたちが夢見るファンタジーは、クリスマスの原形です。

願う前にキリストは再臨を約束

新約聖書の最後の書物、ヨハネの黙示録は、天上のイエス・キリストと信徒の間で交わされた会話で終わります。先ずイエス・キリストが告げます。

「私はすぐに行く」。すると信徒が答えます。

「アーメン。主イエスよ、来てください」。

この会話は、新約聖書をまとめた初代キリスト教徒の祈りを総括していると言えます。

黙示録は、ローマ帝国から厳しい迫害を受けていた1世紀末のキリスト教徒が著作した書物です。そのテーマは、イエス・キリストが再び天から降り、天の王国を地上に建ててくださるよう願う信徒の祈りです。ここで注目すべきことは、先ずイエス・キリストが「私はすぐに行く」と告げると、それに答えて信徒が「来てください」と願う順番です。その逆ではありません。これは、迫害を受けているキリスト教徒が、その苦しみから救い出していただくことを願う前に、すでにイエス・キリストは天から再び地上に降って来て彼らを救い出すことを考えておられる、という信仰の表れです。眠っている間に、プレゼントを置いていってくれるサンタさんがいることを信じて寝た子どもと同じです。

イスラエルの王、イエス・キリスト

教会暦の新年は、クリスマス前、四番目の日曜日に始まります。このクリスマス前の4つの日曜日を「アドヴェント」と呼びます。ラテン語で「近づいて来る」という意味です。誰が？ 勿論、「私はすぐに行く」と約束したイエス・キリストです。アド

ヴェント第1主日のために、J. S. バッハは、コラール「さあ、来てください、異邦人の救い主よ」“Nun komm, der Heiden Heiland”に基づくカンタータを2曲作曲しました（BWV 61, 62）。このコラールは、4世紀にミラノの大司教、アンブロシウスが作詞したラテン語聖歌「いざ来たれ、諸国民の贖い主よ」“Veni redemptor gentium”のドイツ語訳ですが、この聖歌には、ドイツ語に訳されなかった「振り向いてください、イスラエルの王、ケルビムの上に座す方よ」という前詞(マコトバ)があります。この「イスラエルの王」はこの世の王ではありません。なぜなら、天使ケルビムが、王である神の玉座を支えていますから。しかし、その後続くアンブロシウスの聖歌はイエス・キリストに呼びかけていますから、結局、「イスラエルの王」とはイエス・キリストを指していることが分かります。

ろばの子に乗って来る天の王

ここでアドヴェント第1主日のための福音書、マタイによる福音書21章の物語を思い出してください。ろばに乗ってエルサレムに入って来られたイエス・キリストを人々が大歓迎したお話です。このイエスの姿を、福音書は預言者ゼカリヤの預言の成就として説明します。「シオンの娘に告げよ。見よ、あなたの王がやって来る。ろばの子に乗って」。軍馬にまたがり、大軍勢をひきいて、あたりを睥睨しながら行進してくるこの世の王とは対称的に、大きな荷物を背負わされ引かれて来る驢馬、それも柔らかなろばに乗って来る王として、預言者はメシアを描き、イエスの弟子たちは、天の王国の王であるイエスがエルサレムに入って来られたときの姿を、この象徴的な物語で伝えたのです。

アドヴェントとパルマールムは同一の福音書

ここで、この同じ福音書の物語が、棕櫚の日曜日「パルマールム」の福音書としても指定されていることを思い出した方も多いでしょう。「パルマールム」は、その週の金曜日に裁判を受け、十字架につけられて絶命したイエスが墓に葬られた受難週が始まる日曜日です。ですから「アドヴェント」は、クリスマスが、天の王国を地上に建てるために再び受難を目指して、再び天から降って来られるイエス・キリストをお迎えする日なのです。

もう分かっていたかと思いますが。クリスマスは、本来、イエス・キリストの降誕を記念する祝祭ではなく、天上のイエスが再び地上に降って来られること、すなわち、再臨するイエスを歓迎する日だ

ったのです。ところが、ローマ人が12月25日の冬至祭を「不滅の太陽の誕生日」として祝っていたのに対して、キリスト教会が12月25日に「正義の太陽、キリストの降誕日」という新しい意味を与えたことから、クリスマスは春を待つ冬の祭りになり、祝祭的な雰囲気が広まりました。しかしながら、イエスの降誕を伝える福音書の物語は言うまでもなく、それに基づいて後代に創作されたクリスマスをテーマとする物語や、聖歌、コラールなどは、神の子の降誕を喜ぶと共に、キリストが自らを犠牲として人々を救う天の王国の王であることを伝えていきます。

天の王、イエス・キリスト

まず、マタイによる福音書の降誕物語によると、許婚のマリアが結婚前にみごもったことを知り、離縁しようとしたヨセフに天使が告げました。彼女が聖霊によってみごもったことと、この子が民を罪から救うことを。そして東方で新しい王の誕生を知らせる星を発見した博士たちが、生まれた王を拝むためにエルサレムに来てその場所を知らされ、ベツレヘムに行って彼を拝み、宝物を捧げたと伝えます。このように、誕生したキリストが最初から民を救う天の王国の王であると証言しているのです。

他方、ルカによる福音書の降誕物語によると、マリアに受胎を告知した天使が、聖霊によってみごもったマリアが生む男の子には、父ダビデの王座が与えられ、彼はヤコブ、すなわちイスラエルを永遠に治めると予告します。その後、ベツレヘムの馬小屋でイエスが生まれた夜、郊外の野原で羊の群れの番をしていた羊飼いたちに天使の群れが現れ、「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人々にあれ」と讃美を唱えました。「栄光、神にあれ」とは天の王である神の支配を誉め称えるという意味です。ここでも、イエス・キリストが天の王として降誕したことが伝えられています。

このような、イエス・キリストは、天の王として降誕されたという初代キリスト教徒の証言を継承して、4世紀にアンブロシウスが「振り向いてください、イスラエルの王よ」という呼びかけで、イエス・キリストに再臨を願う聖歌「いざ来たれ、諸国民の贖い主よ」の前詞を作詞したことについてはすでにお話ししました。その後、多数のクリスマスの聖歌やコラールが作詞されて来ましたが、その中から1曲だけ紹介しましょう。17世紀にパウル・ゲルハルトは、コラール「見よ、見よ、何と不思議なことか」の第8節で「あちらを見よ、暗い馬小屋に臥しておられる／その支配が万物に及ぶ方を」と、

生まれたばかりの幼な児、イエスが、全世界を治める王であることを歌っています。

これらの証言から学ぶことは、本来、クリスマスは天の王国の王であるイエス・キリストを、もう一度この世にお迎えする祭りであったということです。勿論、それは喜び溢れる時です。同時にこの喜びが重荷を背負ったろばに乗って来る王が支えていてくださることを忘れてはいけません。

* * *

振り返ってみると、今年、2022年は大変な年でした。コロナと呼ばれるパンデミックに次々と新種の株が生じて流行が収まりませんでした。また明らかに地球の温暖化を原因とする大洪水で、島国や低地帯の住民の住処(スカ)が水没する一方、大干魃による大規模な山火事が世界各地で起こりました。このような、全世界の人々が協力して解決すべき問題が生じていたにもかかわらず、ウクライナに侵攻したプーチン・ロシア大統領のような専制的支配者たちが、軍事力によって自分勝手な主張を通そうとしたため、世界中の人々が直接、間接的に戦乱に巻き込まれたり、自衛のためと称して時代錯誤的な軍拡競争を始めました。このような状況を、いささかでも醒めた眼で直視した人々は誰でも、このままでは、近い将来、地球上に人類が生き残ることはできなくなるのではないかと絶望的になったに違いありません。

この深い絶望を克服するために、二つの方法を提案します。まず、クリスマスに再臨するイエスを天の王として迎えるなら、彼が手本を示した天の王国の倫理に従い、強い者勝ちを止めることです。そうすれば世界は平和になるでしょう。次に、全世界を創造したとき、神は自分が創造した世界を「非常に良い」と見たと伝える創世記の超楽観主義によって生きることです。これは「助けに来てください」と願う前に「すぐ助けに行く」と天上のイエスは考えておられるという信仰と同じです。世界は元々良い世界として創造されたという信仰です。それにしても、何に基づいてそのような超楽観主義的な信仰をすることができるのでしょうか？それは今、自分は命を与えられて生きている、という確かな事実を確認することに始まると考えます。生きとし生けるものに与られている命とは、不思議な現象です。どんな状況であっても、生き続けようとする不思議な力です。元々良い世界として創造された世界が元通り良くなることを見とどけましょう。皆さん、世界は良くなると信じて生きましょう。(石田友雄)

天とこの世界を結ぶ響き

祝福の光の輝きの中を歩む

11月11日に、バッハの森記念奏楽堂で「朝のオルガン音楽鑑賞会」が開かれ、宮本とも子（オルガン）鈴木美紀子（ソプラノ）、石田友雄（トーク）の皆さんが、それぞれ演奏と解説をなさいました。

各シーズンの終わりに開かれる「朝のオルガン音楽鑑賞会」は、平日の午前中に気軽に聴きに行ける演奏会で、何度か聴かせて頂いていますが、今回の宮本さんの演奏は、福井での大きな公演を控えられ、いつもにも増して華やかで荘厳、そこに鈴木さんの伸びやかなアリアが染み入るように美しく、バッハの世界に浸らせて頂きました。オルガン・ギャラリーで歌われた鈴木さんのアリアは、上から降ってくるような歌声が神々しく響き渡り、聞き惚れました。

今回のテーマは時期的にクリスマスを待ち望む期節、アドヴェントのコラール「さあ、来てください、異邦人の救い主よ」でした。解説によると、「異邦人の救い主」という表現は、選民ユダヤ人の民族宗教であるユダヤ教の分派として始まったキリスト教が、布教活動とともに世界中に広がり、ユダヤ人以外の人々、異邦人、すなわち世界の諸民族に受け入れられて発展したことを示しているということでした。

このコラールに基づくバッハのオルガン編曲が3曲（BWV 659, 660, 661）演奏され、それぞれの編曲に籠められた意味が説明されました。第一編曲では、神であるキリストが処女マリアに宿り、人として降誕した驚きが表現され、「こちらに近づく」を意味するアドヴェントを表す「歩く音型」のバスで始まる全曲を通じて神秘的な雰囲気が、半音階的なハーモニーや「ため息の音型」によって醸し出されている。第二編曲では、コラールの定旋律と二重バスがカノン風に始まり、常に同等に扱われてトリオを形成、キリストが父なる神と等しい存在であることが表現されている。第三編曲のテーマは光と信仰で、全音量で演奏されるオルガノ・プレノは、暗闇を完全に消し去った新しい光の輝きを表現、キリストを信じる者がイエスに従って祝福の光の中を歩む様を表している。

バッハが好きだけ門外漢の私ですが、以上のような解説をお聞きし、バッハのオルガン編曲が聖

書の一言一句を忠実に音楽で表現していることを、今更ではありますが再認識しました。

このバッハの敬虔な音楽を奏でるパイプオルガンの響きには、今は亡き人々が存在するであろう天上界と現実の世界を結ぶ力があるように感じられ、奏楽堂の空間は、私にはその出会いの装置のように思われます。特に信仰のない私ですが、父が他界した頃に聴かせていただいた折には、バッハの森の奏楽堂の彼方に、笑顔の父と会えたように感じたことを思い出します。

バッハの森のパイプオルガンは、17世紀の古い楽器の修復で腕を磨かれ、オルガン建造に熟達された現代屈指の名匠、ユルゲン・アーレントが建造したとのことで、伝統ある本場の響きを持つ貴重な空間が、こんなにも身近に存在することが有り難く、感謝とともに今回も楽しませて頂きました。

（森脇左知代）

* * *

バッハの森のクリスマス

幸福感に満ちたクリスマス

今年も、「バッハの森のクリスマス」として、大人向けの「クリスマス・コンサート」、お子さん向けの「クリスマスの音楽会」、バッハの森会員のための「祝会」、という三つの集いが催されました。これらの集いは「イエス・キリストの降誕」というテーマで結ばれた、三つの集いによって完結する大きなプログラムでした。それぞれ新たな試みもあり、私は幸いにもその全てに関われたので、とても幸福感に満ちたクリスマスを経験できたことを感謝しております。



クリスマス・コンサート 安らかな喜びに満たされて

12月11日に、バッハの森記念奏楽堂で「クリスマス・コンサート」が、合唱：バッハの森クワイア（指揮：比留間恵）、オルガン：鈴木由帆、ハンドベル：バッハの森ハンドベル・クワイア、訳詞と朗読：石田友雄の皆さんの出演によって開かれました。

いつもの通り、ハンドベルの点鐘で始まり、続いてオルガンによって、J. S. バッハの「パストラレ」が演奏されてクリスマスの雰囲気奏楽堂が包まれたところで、イザヤ書9章5節と詩篇98篇1節をテキストとする W. バードの「一人の幼な児が私たちのために生まれた」“Puer natus est nobis”をクワイアが合唱しました。この曲をいわばイントロダクションとして、T. L. de ヴィクトリアのミサ「おお偉大な神秘よ」“O Magnum Mysterium”全曲が歌われました。ヴィクトリアの同名モテットの旋律を基にした美しい曲です。ミサ曲合唱の合間に、降誕祭第二祝日の使徒書、福音書の朗読があり、クリスマス・オラトリオ第2部から、コラール「あちらを見よ、暗い馬小屋に臥しておられる方を」“Schaut hin, dort liegt im finstern Stall”をオルガンと共に安らかな気持ちで歌いました。メディタツィオ朗読の後でハンドベルが「高い天より私はここに来た」を演奏、この同じ旋律でクワイアが合唱したコラールを、オルガン伴奏と共に会衆が「見よ、この不思議を」と日本語訳の歌詞で斉唱しました。余談ですが、コンサートの前の日に開かれたゲネプロの日に奏楽堂の隣の部屋で、生まれて間もない男の子がオルガンを聴きながら、すやすやと眠っていた姿が印象的でした。

クリスマスの音楽会 素朴な感動に溢れたひととき

12月17日に、子どもと大人のハンドベル・クラブとして、毎月1回日曜日午前中に練習しているハンドベル・リンガーズと、オルガン、声楽、器楽のアンサンブル、それにハンドベル・クワイアが参加して「クリスマスの音楽会」が開かれました。

これまでその企画・運営をごく一部の人たちが担ってきましたが、今回はこの音楽会に参加するメンバー全員で手分けすることになり、様々な役割がある中から、横浜在住でPCも不案内な私でも出来るかもしれないと思い、予約受け付け係をお引き受けし

ました。コロナ感染対策として人数制限をしましたが、思いの外多くの予約をいただき、残念ながらお断りせざるを得ない方々もいました。

当日はリンガーズの子どもたちも、他の参加メンバーのお子さんたちも一緒になって、全員にワクワク感が漂い、お客様のご案内等々、実にテキパキと楽しそうに手伝っていただきました。

音楽会は、美しい影絵による「クリスマス物語」を映写しながら、合間合間にオルガン、声楽、器楽のアンサンブル、ハンドベルの演奏を挟んで進行了ました。音楽演奏の合間に、ハンドベルの置き換えなど、どうしても少々時間が掛かりましたが、その間、後ろのスクリーンで影絵を見ていただいて、目まぐるしい演奏者の交代にも飽きない工夫がされていました。一時間にギュッと詰まった素晴らしい構成だったと思います。リンガーズの皆さんは年々お互いに間の取り方が上手になり、素敵な音が出るようになりました。最後にリンガーズのベルに合わせてドイツ・キャロル「喜びあふれ」を全員で歌い、素朴ながら感動的な音楽会終了後に、ハンドベルとチェンバロとパイプオルガンの見学会を開いたところ、大勢のお子さんたちが押し寄せて賑やかな笑い声のうちに本当に終了しました。

クリスマス祝会 笑顔で喜びを共にした仲間

クリスマスの音楽会の後で、バッハの森会員のための祝会が開かれました。プログラムは三部構成で第一部では、トゥモロー(ともお?)博士のクイズに答えた子どもたちが、大きなボール紙製の「お菓子の家」の鍵をもらって扉を開けると、家の壁いっぱいにお菓子がぶら下がっているの、子どもたちは歓声を上げてお菓子を集めました。

第二部は、大人も参加して段ボール製の大きめのオセロの駒を床にばらまき、チーム別に時間内に猛スピードでひっくり返すゲームをしました。また個人戦で脳トレゲームやビンゴゲームをして皆さん夢中になりました。

第三部では、オルガン伴奏で皆でクリスマス・キャロルを歌いました。このように仲間と笑顔で喜びを共にして過ごすバッハの森ならではのクリスマスをした後、大人も子どももサンタさんの袋に入ったお菓子をおみやげに、温かい気持ちで帰途についたのでした。(三縄啓子)

日誌 (2022 10.1~12.31)

*R: オンライン参加

- 10.10 **コンサート (バッハの森後援)「バロック音楽の花束」** 鈴木美紀子氏、鴨川華子氏。参加者 55 名。
楽器紹介ミニツアー (コンサート後) 参加者 20 名。
- 10.15 **運営委員会** 参加者 5 名 (R1)。
- 11.6 **打ち合わせ** 古楽金管・合唱セミナー発表会 (2023 年 5 月 5 日) 参加者 4 名: 宮下宣子氏、西野潤一氏、バッハの森より 2 名。
- 11.11 **朝のオルガン音楽鑑賞会** 参加者 20 名。
- 11.30, 12.1, 2 **クリスマス準備会** 参加者 9 名。
- 12.5 **電気メーター交換**
- 12.7 **オルガン調整** 河内克彦氏、バッハの森より 1 名。
- 12.11 **クリスマス・コンサート** 参加者 35 名。
- 12.12 **パイプ・オルガン体験プログラム** 参加者 3 名 + 講師 1 名: 計 4 名。
- 12.17 **クリスマスの音楽会** 参加者 56 名。
クリスマス祝会 参加者 19 名。
- 12.21 **打ち合わせ (バッハの森の年末・年始スケジュール)** 参加者 4 名。
- 12.22 **打ち合わせ「バロック音楽の花束」2** (2023 年 4 月 23 日) 鴨川華子氏、バッハの森より 1 名。
「オーケストラ・ユヴェナリス」 (2023 年 4 月 2 日、12 日) 武澤秀平氏、バッハの森より 1 名。
見学 西辻善則氏 (Bach in the Subways Japan 日本オーガナイザー、日本アコーディオン協会理事)。
- 12.25~2023.1.12 **冬期休館**

J.S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ入門

カンタータ: J.S. バッハ「見よ、何という愛を私たちに御父は示されたか」(BWV 64)

コラール: M. ルター「イエスキミを誉めよ」

B. キンダーマン「何をわれは世に求むるか」

J. フランク「主よ、喜び」

オルガン:

- 10.8 安西文子。参加者 9 名。
10.22 安西文子。参加者 8 名。
11.5 金谷尚美。参加者 8 名。
11.19 別所香苗。参加者 8 名。

学習コース

- バッハの森クワイア** 10.1/9 名、10.8/9 名、10.15/10 名、10.22/10 名、10.29/11 名、11.5/12 名、11.12/11 名、11.19/11 名、11.26/13 名、12.3/11 名、12.10 (ゲネプロ) /12 名。

オルガン音楽研究会 10.14/6 名、10.28/5 名。

オルガン・クラブ 10.7/2 名、10.21/3 名、11.4/2 名、11.18/2 名。

歴史書・聖書入門 10.1/7 名、10.8/6 名 (R2)、10.15/5 名 (R1)、10.22/4 名、10.29/7 名、11.5/9 名 (R3)、11.12/5 名 (R1)、11.19/7 名 (R1)、11.26/7 名 (R1)、12.3/6 名 (R1)。

器楽アンサンブル 10.8/3 名、11.12/3 名、11.26/3 名。

声楽アンサンブル 11.12/4 名、11.19/4 名。

ハンドベル・クワイア 11.5/4 名、11.26/4 名。

ハンドベル・リンガーズ 10.16/10 名、11.20/8 名、12.4/8 名。

チェンバロ・レッスン 11.11/2 名。

オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習

- 10.1/2 名、10.4/1 名、10.5/1 名、10.6/1 名、10.7/2 名、10.8/1 名、10.11/1 名、10.13/2 名、10.14/1 名、10.18/1 名、10.19/1 名、10.20/1 名、10.21/3 名、10.22/1 名、10.26/1 名、10.28/1 名、11.1/1 名、11.2/2 名、11.4/2 名、11.5/1 名、11.9/1 名、11.11/2 名、11.12/2 名、11.15/1 名、11.16/2 名、11.18/2 名、11.19/2 名、11.30/1 名、12.3/1 名、12.6/1 名、12.7/1 名、12.10/1 名、12.11/1 名、12.12/4 名、12.13/2 名、12.14/1 名、12.15/1 名、12.16/3 名、12.17/1 名、12.21/1 名、12.23/1 名。

寄付者芳名 (2022.10.1~12.31)